

日本語テキストにおける感動詞「うーん」の使用例について

百 瀬 みのり

About the usage example of the interjection “Uun” in Japanese texts

MOMOSE Minori

〈Abstract〉

This paper is based on the results of investigating the usage examples of the interjection “Uun” in the current Japanese text, and the usage examples in the text. The purpose is to make a proposal that should be improved to an example that is in line with the actual situation of Japanese discourse. The following proposals were made during the discussion:

Firstly, multiple semantic functions of the interjection “Uun” are submitted unorganized in the current Japanese text, but they are learned by classifying them, presenting their appearance scenes, and showing how to use them in the text.

Secondly, pairs of “Uun” usage should be clearly shown to the learner as a pair in response.

Thirdly, in order to contribute to the learner’s learning, the notation format of “Uun” and the semantic function should be shown in correspondence.

Forthly, The attitude of adopting examples in the text that are in line with the actual situation of Japanese discourse, which is not widely adopted now, is important in terms of providing learners with highly practical Japanese learning.

キーワード：感動詞「うーん」、意味機能の分類、返答が対であることの提示、表記形式の統一、談話実態に即した例

1. はじめに

本論は現行の日本語テキストにおける感動詞「うーん」（「ううん」、「うーン」、「ウウン」の表記形式を含む）⁽¹⁾ の使用例について調査した結果を踏まえ、そのテキスト中の使用例について日本語の談話の実態に即した例に改善すべきであるという提案を行うことを目的とするものである。

感動詞「うーん」は応答の際などに用いられる語として、先行研究ではその音的側面について、また談話中での使用頻度の側面から考察がなされてきたが、日本語教育における観点を以て日本語テキストにおけるその扱われ方について述べたものは少ない。本論はその点に注目し、現行の日本語テキスト中での感動詞「うーん」の使用例について調査し、その扱われ方について見直し、日本語談話の実態に即した使用例のモデルを提示すること

で、学習者の日本語学習に寄与する提言を行うことを目的とする。

2. 感動詞について

2.1. 感動詞の定義

まず感動詞の定義を確認しておく。感動詞の定義について『国語学大辞典』(1995)には「品詞の一つ。感嘆詞・喚感動副詞・間投詞とも呼ばれる。Interjection にあたる。意義的には自分の感動・詠嘆の感情、相手に対する呼びかけ・応答の作用を表し、職能的には単独で文を形成することがあり、形態的には自然の叫びに近い語音構造を持つ、といった点を一般的な特徴とする。(中略)他の語詞類の語音構造が、内容との間に必然的な関係がなくて恣意的であるのに対して、感動詞の語音構造は、その内容との間にかなり必然的な関係をもつ(渡辺, 1995, p.200)。」とあり、『国語学研究事典』(1996)には「話し手の感情の表出である感嘆・誘い・呼び掛け・応答などが、知的反省を加えず直接に表現された語。(中略)日本語の場合は、文の初め(ママ)に置かれるのが原則で、後に続く文に感情的な要素を与え、または「はい」「いいえ」のように、質問に対して応答の内容をあらかじめ示すところに特色があり、文にかかる一種の修飾語の働きを示している。(中略)感動詞の本質は、話し手の主観的な感情・意志を非分析的に生のままに表現するものであるため、話し手の過去の感情・意志、および聞き手・第三者の感情・意志を表現することができず、アクセントも不安定であり、会話文に用いるのが主で、地の文に用いられることは稀である(佐藤, 1996, p.146)。」とある。本論でもこれらに則り、感動詞は話し手の感情や聞き手への呼び掛け、応答などを表すことばであること、それは話し手の自然的、生理的な感情や反応を直接的に表現したものであると考えられること、その表す意味内容と言語記号との間には、他の品詞類の語とは異なり非恣意的、必然的な関係が認められることを前提として論じていくこととする。

さらに本論では感動詞を、話し手の感情の表出を表すことばと、話し手から聞き手へのはたらきかけを表すことばの二種に分類して考えていきたい。これは、『国語学大辞典』(同)中の「感動詞はその内容によって、狭義の感動詞と応答詞とに区分される。前者は、「ああ(悲しい)」「おお(見事だ)」「やあ(大変)」などを言い、後者は「おい(君)」「ねえ(ごらんよ)」などの呼びかけ、「はい(そうです)」「いや(とんでもない)」などの返答を指す。前者は自己の感情の表出であり、後者は相手へのはたらきかけで、言語行動における自分と相手との二極性に対応し、言語の世界の基盤がどこにあるかを暗示するもの(渡辺, 1995, p.200)」という記述、また『国語学研究事典』(同)中の「山田孝雄は、これを副詞の一種として感動副詞(感応副詞とも)と名付け、感動した時の気持(ママ)を

表わすものと、または誘い・呼び掛けなど、意志発表の前提を表わすものの二種に分類した（佐藤，1996，p.146）。という記述を踏まえ、感動詞を前述のように二種に分類する考え方の繁用性が高いこと、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2011）などの日本語教育の分野でも、「ああ」や「おや」「あら」などは感動詞と呼ばれます。「はい」「いいえ」などは、特に応答詞と呼ばれることもあります（庵・高梨・中西・山田，2011，p.347）。と、この分類が適用されていることに因る。

2. 2. 感動詞の呼称の歴史

『国語学研究事典』（同）〈佐藤執筆担当「感動詞」の項，1996，p.146）によれば、明治期以前の感動詞は「歎息詞」（本木正栄ら（1814）『^{あんげりあ}諳厄利亞語林大字彙」、桂川甫周校訂（1855～1858）『和蘭字彙』）、^{なげきことば}「感動言」（鶴峯戊申（1833 刊行）『語学新書』）などの名称で呼ばれ、明治期になってからは「歎息詞」（ヘボン〈J.C.Hepburn〉（1872）『和英語林集成』第二版）、「間投詞」（同（1886）『和英語林集成』第三版）、「感詞」（田中義廉（1874）『小学日本文典』）、「感嘆詞」、「間投詞」（中根淑（1876）『日本文典』）などの名称が用いられた。「感動詞」という名称を初めて用いたのは大槻文彦（1891）『語法指南』であるとのことである。この後、「感動詞」の名称が定着するが、山田孝雄はこれを『日本文法論』（1908）において、副詞の一種とし、「感応副詞」または「感動副詞」とした。また明治期の文典には助詞を感動詞に含む、感動詞の応答の機能を認めないという見方も一部あったようであるが、それらも昭和期にはほぼなくなり⁽²⁾、先述のように「感動詞」の呼称は、話し手の感情や聞き手への呼び掛け、応答などを表すことばを指すようになったと考えられる。

上記を踏まえ、本論でも「うーん」については感動詞として考えることとする。なお、本論は感動詞「うーん」について扱うものであるが、その周辺の形式として感動詞「うん」についても触れる。「うーん」の表記形式については先述のように「ううん」、「ウーン」等もあるが本論では論文中では基本的には「うーん」の表記で統一し、後出の表中などでは各日本語テキスト内での表記に倣うこととする。

3. 先行研究とその問題点

2. 1. で述べたように、感動詞は他の品詞に比して「形態的には自然の叫びに近い語音構造を持つ（渡辺，1995，p.200）。」、「話し手の主観的な感情・意志を非分析的に生のままに表現する（佐藤，1996，p.146）。」という点から、生理的な音声との関りが深いと考

えられ、先行研究でもその音的側面について、またそれを踏まえて談話中での使用頻度の側面について触れたものが見られる。

音的側面について触れたものには、須藤 (2007)、(2008)、(2010)、郡 (2018)、坊農 (2002) がある。須藤は感動詞「うん」について、「意味・機能別に音声の特徴もそれぞれ異なるものが対応している (須藤, 2007, p.105)」こと、「相手の発話を聞いて理解する際の受け入れの「うん」は、(中略) 受け入れの度合いが「うん」の (中略) 韻律の特徴にある程度反映されている (須藤, 2008, p.106)」こと、「「ううん」には (中略) 音調の特徴として、「加工しきった後に上昇が伴う (須藤, 2010, p.48)」ことが必須であることを述べている。郡 (2018) は感動詞と意味の結びつきを類型的に捉え、坊農 (2002) は「うん」と「そう」の一語性をめぐり、音声的側面と指示性の側面から議論を行い、前出の相手発話を指示して用いられ、指示性を有する「そう」に比し、「「うん」は、音声的側面から見ると、イントネーションの影響でアクセントが消失することから、一語性が低いと考えられる。また、「うん」は、単に応答していることを表す応答詞であるため、「そう」のような指示性は持たない。これらの点から、音声的にも意味的にも、「そう」は一語性が非常に高く、それに比べて「うん」の一語性は低いことが指摘できる (坊農, 2002, p. 124)」とした。

このような音的側面からの考察を行った先行研究はなべて、感動詞「うん」などのアクセントやイントネーションなどの音的側面と、それが表す意味機能に相関性があることを述べている。

一方、使用頻度の側面について触れたものには、柏野 (2019)、中島 (2000) がある。柏野はオンライン検索システム『中納言』で公開されている『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に出現する感動詞の認定のされ方や出現件数を集計した。その調査によれば、『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に出現する感動詞一般の出現頻度上位 10 語とその出現件数は、「うん」が 31,066 件、「あっ」が 5,085 件、「ああ」が 5055 件、「はい」が 4,173 件、「いや」が 2,152 件「えっ」が 1,726 件、「ふん」が 1,268 件、「へえ」が 985 件、「んっ」が 902 件、「ええ」が 851 件であり⁽³⁾、合計で 57,729 件である旨が報告されており、感動詞中では「「うん」の使用が非常に多いことがわかる (柏野, 2019, p.373 ~374)。」と報告した。中島 (2000) はあいづちの「はい」と「うん」の出現頻度を比較し、「「はい」はあいづち率⁽⁴⁾が 21.6%、「うん」はあいづち率が 53.7%と、「うん」のほうが 2 倍以上も多い (中島, 2000, p.112)」こと、「「うん」はインフォーマル場面だけでなくフォーマル場面にも多用され、(中略) 女性同士の対話の時に多用される傾向がある (中島, 2000, p.112~113)。」ことを報告した。このような、談話中での使用頻度の側面

からの考察を行った先行研究は、談話中に出現する感動詞の中で、「うん」の出現率が他の感動詞に比して高いことを述べている。

これらの先行研究は、感動詞「うーん」が多様な意味機能を持ち、その音的側面とそれが表す意味機能には相関性があり、談話中に他の感動詞に比して高い出現率で現れる語であることを述べているが、感動詞「うーん」の日本語テキストにおける扱いについて触れてはいない。そこで本論では前述のように、多様な意味機能を持ち、談話中に他の感動詞に比して高い出現率で現れる語である感動詞「うーん」に着目し、その日本語テキストでの扱われ方、具体的には使用例を調査し、提言を行いたい。

4. 本論における感動詞「うーん」を考える枠組みについて

まず初めに感動詞「うーん」の語としての分類を考える。これについては森山（1989）、定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）、串田（2002）、定延（2002）などによる分類があり、これらは感動詞をその談話中における役割から考える立場と、発生の仕方から考える立場の二つの立場の差異による分類の仕方を示す。前者の立場を取るのが森山（1989）、串田（2002）、定延（2002）であり、後者の立場を取るのが定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）であると言える。

前者の立場を取る森山（1989）はまず、応答を談話展開において相手の発話をどう受け止めるかにかかわる「態度表明系統の応答」と、受け取りというよりも次の展開へ重点を置く「展開制御系統」の応答に分け、その「態度表明系統の応答」を、「伝達自体に対する応答」、先行文が動きを要求する「策動文に対する応答」、先行文が認識的な伝達を表す「認識的文に対する応答」に分ける。さらにその「認識的文に対する応答」を、「応答者にもととの情報がない場合」と「応答者にその情報が既にある場合」に分け、その「応答者にその情報が既にある場合」の「応答留保」を表す「言い澁み類」に、感動詞「うーん」进行分类している⁽⁵⁾（森山，1989，p.72～83）。また、串田（2002）は「「うん」⁽⁶⁾とは、相手の直前の発話を、自分の先行発話への「相手の理解を示すもの」として「聞き留めた」ことを主張するために利用可能な手続きである。ゆえにそれは、「相手が示した理解」を「承認」するときにも、「相手が示した理解」を「否認」しつつ自分の発話計画を先に進めようとするときにも利用できる（串田，2002，p.30）。」とした。また定延（2002）は、感動詞「うーん」を「非言語的な「うん」」、「独話で発せられる「うん」」、「対話固有の「うん」」に分類し、さらにその「対話固有の「うん」」を、「うながしの「ん」」、「フィラーの「ん～」」、「言語情報受容の「うん」」に分けて考察している（定延，2002，p.96～109）。これらの先行研究は、感動詞「うーん」を対話中の要素であると考えて分類している点が

共通していると言えよう。

一方、後者の立場を取る定延・田窪 (1995)、田窪・金水 (1997) のうち、まず定延・田窪 (1995) は「言語表現は話し手の心内に貯蔵されている情報データ自体に関わるものと、話し手の心的操作に関わるものに大きく二分できる (定延・田窪, 1995, p.74)。」という見方をし、その代表的な型式として「ええと」と「あのー」について考察し、「「ええと」と「あの (ー)」は、話し手が何らかの心的操作をおこなっている間に発話される心的操作標識である (定延・田窪, 1995, p.78)。」とする。また田窪・金水 (1997) は「感動詞・応答詞の類は、心的な情報処理の過程が表情として声に現れたものと言える (田窪・金水, 1997, p.257)。」という見方をし、感動詞を「「入出力制御系」と「言い淀み系」 (田窪・金水, 1997, p.263) に分けてその用法を見て、「うーん」を「入出力制御系」の「迷い」と「嘆息」を表す語として考えている (田窪・金水, 1997, p.272)。また定延 (2002) は感動詞「うん」を「非言語的な「うん」」、「独話で発せられる「うん」」、「対話固有の「うん」」に分けて考え、この「対話固有の「うん」」をさらに「うながしの「ん」」、「フィラーの「ん～」」、「言語情報受容の「うん」」に分けて考察している (定延, 2002, p.95～109)。

これらを基に、本論では感動詞「うーん」について考察するにあたり、その発生の仕方については田窪・金水 (1997)、その談話中における役割については定延 (2002) の立場に則って考えることとしたい。田窪・金水 (1997) の立場は「感動詞や応答詞を (中略) 対話処理操作の心的モニターとしてみることによりこれらの形式の機能を解明でき、さらには、このような形式の研究を通じて文産出や文解析に関わる心的操作の性質が一部つかめる (田窪・金水, 1997, p.260)」という感動詞をその発生から根源的に考察できる見方であること、また定延 (2000) は感動詞「うーん」の役割を対話の中で捉えている点が、日本語教育の場面での考察に適していると考えられるためである。

5. 日本語テキストにおける感動詞「うーん」について

5. 1. 現行の代表的な日本語テキストに見られる感動詞「うーん」の使用数

(表 1) ～ (表 4) は、現行の代表的な日本語テキスト (『みんなの日本語』、『しんにほんごのきそ』、『初級日本語 [げんき]』、『できる日本語』) における、感動詞「うーん」の使用数 (学習項目として文、単語練習などに採り上げられた例数) である。

(表1)『みんなの日本語』中の感動詞「うーん」の使用数

使用例出現数	テキスト名	『みんなの日本語』 初級Ⅰ 本冊 第2版		『みんなの日本語』 初級Ⅱ 本冊 第2版		『みんなの日本語』 中級Ⅰ 本冊		『みんなの日本語』 中級Ⅱ 本冊		計
①	諾否疑問文の返答「うん」 (客観的事実を問う疑問文の返答として)	12	(5)	0	(1)	8	(7)	9	(0)	29 (13)
②	諾否疑問文の返答「うん」 (客観的事実を問う疑問文の返答として)	16	(10)	0	(1)	2	(4)	3	(4)	21 (19)
③	諾否疑問文の返答「うん」 (意向・態度を問う疑問文の返答として)	1	(1)	2	(2)	4	(0)	2	(1)	9 (4)
④	諾否疑問文の返答「うん」 (意向・態度を問う疑問文の返答として)	0	(0)	2	(1)	6	(1)	0	(0)	8 (2)
⑤	あいづちの 「うん」 (非疑問文の返答として)	1	(0)	0	(2)	9	(4)	0	(24)	10 (30)
⑥	あいづちの 「うん」 (非疑問文の返答として)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	2	(1)	2 (1)
⑦	迷いの 「うーん」 (先行文についての返答として)	0	(0)	0	(4)	0	(1)	3	(3)	3 (8)
⑧	先行文のない 「うーん」 (話し手の感情の表出として)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0 (0)
計		30	(16)	4	(11)	29	(17)	19	(33)	82 (77)

(表2)『しんにほんごのきそ』シリーズ中の感動詞「うーん」の使用数

使用例出現数	テキスト名	『しんにほんごのきそ』 Ⅰ		『しんにほんごのきそ』 Ⅱ		『新日本語の中級』 本冊		計
①	諾否疑問文の返答「うん」 (客観的事実を問う疑問文の返答として)	4	(2)	0	(0)	7	(9)	11 (11)
②	諾否疑問文の返答「うん」 (客観的事実を問う疑問文の返答として)	3	(1)	0	(0)	3	(4)	6 (5)
③	諾否疑問文の返答「うん」 (意向・態度を問う疑問文の返答として)	2	(0)	3	(0)	3	(3)	8 (3)
④	諾否疑問文の返答「うん」 (意向・態度を問う疑問文の返答として)	0	(0)	0	(0)	6	(5)	6 (5)
⑤	あいづちの 「うん」 (非疑問文の返答として)	1	(0)	0	(0)	12	(17)	13 (17)
⑥	あいづちの 「うん」 (非疑問文の返答として)	0	(0)	0	(0)	2	(0)	2 (0)
⑦	迷いの 「うーん」 (先行文についての返答として)	1	(0)	0	(0)	8	(6)	9 (6)
⑧	先行文のない 「うーん」 (話し手の感情の表出として)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0 (0)
計		11	(3)	3	(0)	41	(44)	55 (47)

(表3)『初級日本語 [げんき]』中の感動詞「うーん」の使用数

使用例出現数	テキスト名	『初級日本語 [げんき]』 第3版 Ⅰ		『初級日本語 [げんき]』 第3版 Ⅱ		計
①	諾否疑問文の返答「うん」 (客観的事実を問う疑問文の返答として)	4	(21)	10	(4)	14 (25)
②	諾否疑問文の返答「うん」 (客観的事実を問う疑問文の返答として)	3	(14)	3	(8)	6 (22)
③	諾否疑問文の返答「うん」 (意向・態度を問う疑問文の返答として)	0	(0)	2	(2)	2 (2)
④	諾否疑問文の返答「うん」 (意向・態度を問う疑問文の返答として)	2	(2)	2	(0)	4 (2)
⑤	あいづちの 「うん」 (非疑問文の返答として)	0	(1)	3	(4)	3 (5)
⑥	あいづちの 「うん」 (非疑問文の返答として)	0	(0)	0	(0)	0 (0)
⑦	迷いの 「うーん」 (先行文についての返答として)	2	(2)	0	(4)	2 (6)
⑧	先行文のない 「うーん」 (話し手の感情の表出として)	0	(0)	0	(0)	0 (0)
計		11	(40)	20	(22)	31 (62)

（表 4）『できる日本語』中の感動詞「うーん」の使用数

使用例出現数 テキスト名	『できる日本語 初級本冊』	『できる日本語 初中級本冊』	『できる日本語 中級本冊』		計
① 諾否疑問文の返答「うん」（客観的事実を問う疑問文の返答として）	5 (0)	8 (0)	16 (1)		29 (1)
② 諾否疑問文の返答「うん」（客観的事実を問う疑問文の返答として）	3 (0)	2 (0)	3 (0)		8 (0)
③ 諾否疑問文の返答「うん」（意向・態度を問う疑問文の返答として）	0 (0)	8 (0)	2 (0)		10 (0)
④ 諾否疑問文の返答「うん」（意向・態度を問う疑問文の返答として）	0 (0)	1 (0)	1 (0)		2 (0)
⑤ あいづちの「うん」（非疑問文の返答として）	3 (0)	4 (0)	8 (2)		15 (2)
⑥ あいづちの「うん」（非疑問文の返答として）	0 (0)	1 (0)	0 (0)		1 (0)
⑦ 迷いの「うーん」（先行文についての返答として）	2 (0)	6 (0)	7 (1)		15 (1)
⑧ 先行文のない「うーん」（話し手の感情の表出として）	0 (0)	2 (0)	1 (1)		3 (1)
計	13 (0)	32 (0)	38 (5)		83 (5)

※ 数値はそのテキスト中の本文（単語、練習問題、談話等全て）の内容に採り上げられている感動詞「うーん」の使用例数である。

※ （ ）内の数値は、各テキスト中の談話スクリプトやワーク等の本文とは別の扱いになっているものの中での感動詞「うーん」の使用例数である。

※ ④の「うーん」の形式には「うーん」の表記の例も含む。

上記表中で①～⑧に分類した例の代表的なものを以下に示す。以下全ての例について、会話の場合は「 」を付けて示す。用例の提示なのでテキスト中に見られる下線、番号は記載せず、「うーん」とその周辺の形式部分に論者による下線を付す。

【① 諾否疑問文の返答「うん」（客観的事実を問う疑問文の返答として）の例】

A：「フクロウって鳥、知ってる？」 B：「うん。知ってるよ。」（『みんなの日本語』中級 I 本冊，6 課，p.72）

【② 諾否疑問文の返答「うん」（客観的事実を問う疑問文の返答として）の例】

「きのう、木村さんに会った？」 「…うん、会わなかった。」（『みんなの日本語』初級 I 第 2 版本冊，20 課，p.170）

【③ 諾否疑問文の返答「うん」（意向・態度を問う疑問文の返答として）の例】

「コーヒーを飲む？」 「…うん、飲む。」（『しんにほんごのきそ』I，20 課，p.162）

【④ 諾否疑問文の返答「うん」（意向・態度を問う疑問文の返答として）の例】

「コーヒーを飲む？」 「…うん、飲まない。」（『しんにほんごのきそ』I，20 課，p.162）

【⑤ あいづちの「うん」（非疑問文の返答として）の例】

「そっか。大変だったね。」 「うん。あ、西川さん、こんばんは。」（『できる日本語』初級

本冊, 11 課, p.204)

【⑥あいづちの「ううん」(非疑問文の返答として)の例】

「あそこでおばあさんにバス乗り場の場所を聞かれたんだ。それで、時間がかかっちゃった。ごめんね。」「ううん。じゃ、電車でホテルまで行って、それから、山の上へ行ってみよう。」(『できる日本語』初中級本冊, 10 課, p.150)

【⑦迷いの「うーん」(先行文についての返答として)の例】

ゆい:「メアリーさん、元気がありませんね。」メアリー:「うーん。ちょっとおなかが痛いんです。」ゆい:「どうしたんですか。」(『初級日本語 [げんき]』第3版I, 12 課, p.272)

【⑧先行文のない「うーん」(話し手の感情の表出として)の例】

リポーター:「うーん、野菜が新鮮でおいしいです。」(『できる日本語』中級本冊, 2 課, p.30)

(表1)～(表4)に上記①～⑧の分類で各テキストに出現する感動詞「うーん」の使用例を整理して、確認できたことを以下1.～3.に示す。

1. 感動詞「うーん」には上記(表1)～(表4)に示したように複数の意味機能があるが、それらは現行の日本語テキスト内では未整理のまま提出されている。本論ではそれを表中の①～⑧のように整理したが、感動詞「うーん」の意味機能を分類した上で、先行文に対する応答・返答を表す感動詞「うん」、「ううん」と共に「うーん」が出現する場面を提示して、その使い方をテキスト中で示す方が、学習者にとっては効果的な学習となると考えられる。

特に先行文に対する応答を表す感動詞「うん」、「ううん」は、話し手と聞き手の親疎関係が親密な場面で出現するケースが多いがテキスト内にその情報が明文化されていない。また、感動詞「うん」、「ううん」についてはそれが採り上げられている課が集中している(『みんなの日本語初級I第2版本冊』の20課、『しんにほんごのきそI』は20課、『初級日本語 [げんき] 第3版I』は8課、『できる日本語初中級本冊』は10課)。学習項目として、テキスト中に集中型より分散型での提出を行い、断続的な練習が行えるようにするべきである。

2. ③の【諾否疑問文の返答「うん」(意向・態度を問う疑問文の返答として)】と④の【諾否疑問文の返答「ううん」(意向・態度を問う疑問文の返答として)】は返答として対になるものであるが、肯定の返答(話し手の依頼や誘いかけ、提案などを承諾する返答)である③の「うん」と、否定の返答(話し手の依頼や誘いかけ、提案などを断る、拒絶・

拒否する返答)である④の「うん」を、返答として対になるものとして扱って返答の仕方の練習として提示しているのは『初級日本語 [げんき] 第 3 版Ⅱ』, 15 課, p.80 の A : 「カフェでコーヒーを飲もう (か)。」B : 「うん、そうしよう。/うーん、ちょっと……。」が確認できるに留まる。⁽⁷⁾

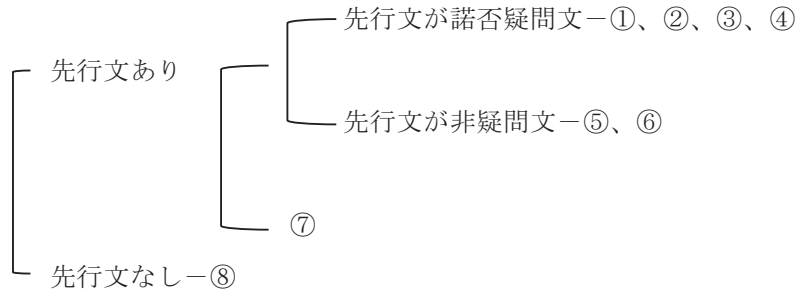
①の【諾否疑問文の返答「うん」(客観的事実を問う疑問文の返答として)】と②の【諾否疑問文の返答「うん」(客観的事実を問う疑問文の返答として)】が返答として対になるものとして扱われ各テキスト中で返答の仕方の練習として対の形で提示されているのに比し、この③と④の提示のされ方は学習者に練習の趣旨が伝わりにくいと思われる。③の依頼、誘いかけ、提案等の相手の申し出を承諾する形式と、④の社会的な礼儀に適った形式で相手の申し出を断る、拒絶・拒否する形式が、返答として対になる形であることを学習者が意識できるようにして学習する機会を提供するために、上記③と④の形式は返答として対になるものであることが分かるようにしてテキストに提出することを提案する。

3. 現行の日本語テキストの代表的なものの中での感動詞「うーん」の表記形式には「うーん」と「うん」が主に見られるが、その表記形式の差異については明確な基準がなく、不統一なままでテキストに提出がなされている。調査した結果、表記形式が意味機能の差異に対応的であるテキストと、非対応的なテキストがある。前者は『みんなの日本語初級Ⅰ本冊第 2 版』・『みんなの日本語初級Ⅱ本冊第 2 版』・『みんなの日本語中級Ⅰ本冊』・『初級日本語 [げんき] 第 3 版Ⅰ』・『初級日本語 [げんき] Ⅱ』・『できる日本語初級本冊』・『できる日本語初中級本冊』・『できる日本語中級本冊』で、後者は『みんなの日本語中級Ⅱ本冊』と『しんにほんごのきそⅠ』・『しんにほんごのきそⅡ』・『新日本語の中級本冊』である。

前者のテキストでは、前出の文に対して否定の意味機能をもって応じる感動詞を表す際は「うん」、その他の意味機能を持つ感動詞を表す際は「うーん」の表記形式が採られている。一方、後者のテキストでは表中で②、④で示した否定の意味機能と、⑦の迷いの意味機能が同じ「うん」の形式で記述されている。⁽⁸⁾ これは「うーん」の意味機能を判別する上で混乱の元となる。また他社テキストとの表記上の不統一も問題であると思われる。不統一な表記形式は改め、「うーん」の意味機能に応じた、かつ統一した表記形式で提出を行うことが、学習効果を考えた上では必要であろう。

5. 2. 現行の代表的な日本語テキストに見られる感動詞「うーん」の使用例

前項 5. 1. の①～⑧の関係を整理して示す。



(図1) 感動詞「うーん」の分類の相関

上記(図1)の①～⑥の「うん」、「ううん」は、先行文に対する応答、返答を表す語として日本語テキスト中での使用例が各テキスト中で整理して提出されているのに対し、⑦迷いの「うーん」と⑧先行文のない「うーん」は①～⑥の「うん」、「ううん」との関わりが整理されておらずそれらとの関係性が捉えにくい。また、②、④否定の意味機能を表す「ううん」と⑦迷いの「うーん」や⑧先行文のない「うーん」は音韻的発音も異なる。これらの情報もテキスト内では音声のみではなく視覚的に表すようにして提出する方が良いと思われる。

感動詞「うーん」は①～⑧まで、先行文や何らかの感覚的、論理的刺激を受けて発せられる語であり、その点において、それらの先行部がなくても発せられる「あの(ー)」とは異なる。先行部と隣接ペアを作る語であり、その機能から先行部と後行部を繋ぐ「フィラー」としても談話中で使用される場合も生じてくる。前項4.において定延(2002)が「フィラーの「ん～」(同, p.100)を分類対象として挙げたのも、これによるとと思われる。

田窪・金水(1997)は感動詞について、「感動詞、応答詞は外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部の情報処理状態の現れ」(同, p.261)であり、「聞き手からすればこれらを聞くことにより相手の処理状態、処理の内容を察知することができ、どのような反応がかえってくるか、その大体の方向性を具体的な内容を持つ発話がなされる前に察知することができる(同, p.261)。」とする。感動詞「うーん」についてもこの感動詞全体の枠組みを意識しつつ、必要な場面設定をした上でテキストに提出することが期待されよう。

最後に、本論で調査を行った現行の日本語テキストでの感動詞「うーん」の使用例は、それが文頭に置かれたもののみであったが、現実の談話では

- (1) 「何千年という歴史のある杉とかを見るとやっぱり、もう圧巻ですよ。生命力がすごいっつうか、うーん、なんだろうな、風格というか、」(「さわやか自然百景 新春ス

ペシャル『森の国 日本』(2012 年 1 月 2 日 NHK 総合での放送中の談話、話者は 20 代後半の男性))

のような文中での⑦の「迷いの「うーん」」の使用や、

(2)「(作文を確認して) うーん、よし！」(2021 年 1 月 15 日大学授業のグループワークにおいて、同グループの他者の作文の問題点をフィードバックした後、その作文の執筆者本人による修正を確認した際の学生の発話、話者は 10 代後半の女子学生。)

のような、テキスト中ではあまり採り上げられていない⑧の「先行文なしの「うーん」」の例も見られる。これらのような日本語談話の実態に即した例もテキスト中で採用していく姿勢は、学習者にとってより実用性の高い日本語を学ぶ機会を得ることに通じる。現行の日本語教育を拡充する意味でも、これらについて採用していくことが重要であると考えられる。

6. まとめ

以上、この論で述べたことをまとめる。本論は現行の日本語テキストにおける感動詞「うーん」について調査し、そのテキスト中の使用例について以下の 1. ～4. を提案した。

1. 感動詞「うーん」の複数の意味機能は現行の日本語テキスト内で未整理のまま提出されているが、それらを先行文に対する応答・返答を表す感動詞「うん」、「ううん」、あいつちの「うーん」、「迷いの「うーん」」、「先行文のない「うーん」」のように分類し、その出現場面を提示して使い方をテキスト中で示す方ことで学習効果が望める (5. 1.)。
2. 感動詞「うーん」の、表中③の依頼、誘いかけ、提案等の相手の申し出を承諾する形式と、表中④の社会的な礼儀に適った形式で相手の申し出を断る、拒絶・拒否する形式が、返答として対になる形であることを学習者が意識できるようにして学習する機会を提供するために、上記③と④の形式は返答として対になるものであることを明示してテキストに提出するべきである (5. 1.)。
3. 現行の日本語テキストの代表的なものの中での感動詞「うーん」の表記形式には「うーん」と「ううん」が主に見られるが、その表記形式の差異については明確な基準がなく、不統一である。これは学習者の学習上の負担になるため、不統一な表記形式は改め、「うーん」の意味機能に応じた、かつ統一した表記形式で提出を行うことが学習効果を考えた上では必要である (5. 1.)。
4. 現実の談話では、表中⑦の「迷いの「うーん」」の文中での使用や、表中⑧の「先行文なしの「うーん」」の例も見られる。これらのような日本語談話の実態に即した例もテキスト中で採用していく姿勢は、学習者に実用性の高い日本語学習を提供するという

意味で重要である (5.2.)。

注

- (1) 「洒落本・人情本では、8割以上の感動詞が片仮名表記されている。(中略) 明治・大正期において、文語体の文章では漢字表記される感動詞が多いが、口語体の文章では少ない。口語体の文章では、1880-90年代にかけて、感動詞の片仮名表記が多く見られるが、1900年代に入ると感動詞の平仮名表記が進み、大正期には6~7割程度、特に文芸においては一部雑誌をのぞき、8割前後の感動詞が平仮名表記されるようになる(石川, 2019, p.13)。」とあることから、現行の感動詞の表記形式は平仮名表記が主であると考えておく。
- (2) 「明治期には「助詞」を感動詞の一類とする立場の文典の方が多く、大正期には「感動詞＝独立語」であると論ずる文典が増えるようになり、昭和期には約9割の文典が助詞を感動詞から除外している。(中略) 感動詞における「応答」の機能は、明治期には1割強の文典でしか認められていないが、大正期には半数以上、昭和期には7割超の文典で認められるようになった(石川, 2018, p.36-37)。」による。
- (3) 「うん」には「うーん」、「うん」、「うんっ」、「うんー」、「んーん」、「あっ」には「あ」、「あっ」、「ああ」には「ああ」、「あー」、「ああー」、「あーあ」、「あーあー」、「ああっ」、「あーっ」、「はい」には「はいー」、「はいー」、「はい」、「はいー」、「はいっ」、「いや」には「いーやー」、「いや」、「いやー」、「いやーん」、「いやっ」、「や」、「やー」、「やーん」、「えっ」には「え」、「えっ」、「ふん」には「ふーん」、「ふん」、「ふんっ」、「へえ」には「へ」、「へえ」、「へー」、「へえー」、「へーえ」、「へーえー」、「へっ」、「んっ」には「ん」、「んっ」、「んん」、「ええ」には「ええ」、「えー」、「ええー」、「えーっ」の形式を含む(柏野, 2019, 表7, p.373)。
- (4) 「あいづちの総数 1882 例に対する比率をいう」(中島, 2000, p.105)
- (5) 森山は「うーん」について、「ウーン」と片仮名表記している。また、同じ「言い淀み類」の分類に属する感動詞として、「マア」、「エート」を挙げている。さらに感動詞「うん」については、「態度表明系統の応答」の「伝達自体に対する応答」の中の「聞き取り表示類」として、「ふん」、「はい」、「はあ」、「ああ」と共に分類している。「うん」、「ふん」、「はい」、「はあ」、「ああ」については森山の原表記も平仮名表記となっている。(森山, 1989, p.75)。
- (6) 串田は「うん」の表記で「「うん」と「ん」「んん」「ふん」「ふ～ん」「ああ」などの間に厳密な境界は引きにくいので、本稿では「うん」の範囲を狭く限定せず、「ん」「んん」「ふん」「ふ～ん」「ああ」などに近いものも、適宜「うん」として考察対象とする(串田, 2002, p.96)。」とし、同論中で実際に「ん～」(同, p.100)、「う～～ん」(同, p.104)、「ううん」(同, p.104)などの形式も考察している。
- (7) 『初級日本語 [げんき] 第3版 I』中には、A:「その人の仕事は何でしょうか。」B「歌手です。でも、あまり有名じゃないと思います。」……〈やり取りが続き〉A:「そうですか! 会いたいです。」/「うーん、ちょっと。」(12 課, p.289) の例があるが、これは表中の【③諾否疑問文の返答「うん」(意向・態度を問う疑問文の返答として)の例】、【④諾否疑問文の返答「ううん」(意向・態度を問う疑問文の返答として)の例】には該当しないので、ここでは考慮の対象外となる。

(8)『みんなの日本語中級Ⅱ本冊』中のスクリプトに、タワボン：「佐藤さんが初めて読んだマンガって何ですか。」佐藤さん：「うん。はっきり覚えてないけど、『ガラスの仮面』かな。」(14 課, p.64) と、表中⑦で示した「迷いの『うーん』」を、②、④の否定の意味機能を表す「ううん」と同じ表記形式で表した例が見られる。同テキストでは他の⑦の「迷いの『うーん』」の例は「うーん」の表記形式で表している(「青木：ほんと、頭痛いよ。」「カリナ：うーん、2 万円ぐらいで済めば安いものじゃない。」「『みんなの日本語』中級Ⅱ本冊, 16 課, p.48, CD 1-11, 3. スクリプト)、「いずみ：あら、袋だって必要なのよ。」「ワット：うーん。あれも大切、これも必要だからってとっついて、結局捨てちゃうってことになるんじゃないの?」「『みんなの日本語』中級Ⅱ本冊, 18 課, p.76, CD 1-18, 3. スクリプト)、「あなた、おいくつ?」「先月で三十七になりました。」「うーん、三十七か。もう少し若いほうがいいような気もしちゃうんだなあ。」「『みんなの日本語』中級Ⅱ本冊, 18 課, p.83, II.]」ため、上記例についても「うーん」の表記形式に改めることが望ましいと思われる。

また、『しんにほんごのきそⅠ』・『しんにほんごのきそⅡ』・『新日本語の中級本冊』は表中⑦で示した「迷いの『うーん』」の全例を、②、④の否定の意味機能を表す「ううん」と同じ表記形式で表している。これは学習者にとって学習上の混同を招く可能性があり、再考の余地があると思われる。

本論中でも述べたように、表記形式が意味機能の差異に対応的である方が学習者の混乱がなく、高い学習効果も望めることから、これらについても表中⑦で示した「迷いの『うーん』」の例は「うーん」、②、④の否定の意味機能を表す例は「ううん」と、表記形式を分けて記述する姿勢が望ましいと考える。また、学習者が多種のテキストを使用して学習する可能性も考え、このような記述形式についてはテキストを跨って統一的にして学習効果を上げることが必要であると考え

[参考文献]

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2011)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(同執筆「品詞」の項, pp.347.) スリーエーネットワーク
- 石川創 (2018)「感動詞」の定義の変遷について『駒沢女子大学研究紀要』第 25 号, 駒沢女子大学, pp.25-37.
- 石川創 (2019)「感動詞の表記の変遷に関するノート (1) - 洒落本・人情本および明治・大正期の文章について -」『駒沢女子大学研究紀要』第 26 号, 駒沢女子大学, pp.1-16.
- 柏野和佳子 (2019)『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる応答表現』『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4 巻, 国立国語研究所, pp.368-380.
- 串田秀也 (2002)「会話の中の「うん」と「そう」- 話者性の交渉との関わりで -」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』, ひつじ書房, pp.5-46.
- 郡史郎 (2018)「感動詞の高さの動きから見る日本語の会話表現のイントネーションの特徴」『大阪大学言語文化学』vol.27, 大阪大学言語文化学会, pp.69-81.
- 定延利之・田窪行則 (1995)「談話における心的操作モニター機構- 心的操作標識「ええと」と「あの (-)」 -」『言語研究』108, 日本言語学会, pp.74-93.

- 定延利之（2002）「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』、ひつじ書房、pp.75－112.
- 須藤潤（2007）「日本語感動詞「うん」の意味・昨日の分類から音声的特徴の分析へ」『音声研究』第11巻第3号、日本音声学会、pp.94-106.
- 須藤潤（2008）「「うん系」感動詞の韻律的特徴に関する一考察―「受け入れ」にかかわる意味・機能をめぐって―」『ポリグロシア』15、立命館アジア太平洋研究センター、pp.99－108.
- 須藤潤（2010）「否定の「うん系」感動詞の音調パターン」『音声研究』第14巻第3号、日本音声学会、pp.40－50.
- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』、音声文法研究会、くろしお出版、pp.257－279.
- 中島悦子（2000）「あいづちに使用される「はい」と「うん」―あらたまり度・待遇度から見た出現実態―」『雑誌 ことば』21号、現代日本語研究会、pp.104－113.
- 坊農真弓（2002）「プロソディからみた「うん」と「そう」」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』、ひつじ書房、pp.113-126.
- 森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1、大阪大学文学部日本学科（言語系）、pp.63－88.

〔参考資料〕

- 『国語学大辞典』（1995）国語学会編、（渡辺実執筆「感動詞」の項、pp.200－201.）東京堂出版
- 『国語学研究事典』（1996）佐藤喜代治編、（佐藤武義執筆「感動詞」の項、pp.146.）明治書院
- 音声資料『さわやか自然百景 新春スペシャル「森の国 日本」』（2012年1月2日・総合にて放送）
- （この音声資料は、NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル 2017 年度第2回採択課題「NHK インタビュー番組中の談話に見られるフィラーのはたらきをもつ接続詞について～その発生の経緯、種類、機能、表現効果から戦後の日本語談話の変遷を考える～」の一部である。）

〔使用した日本語テキスト〕

- ・スリーエーネットワーク編（2019）『みんなの日本語初級Ⅰ第2版本冊』
 - ・スリーエーネットワーク編（2019）『みんなの日本語初級Ⅱ第2版本冊』
 - ・スリーエーネットワーク編（2019）『みんなの日本語中級Ⅰ本冊』
 - ・スリーエーネットワーク編（2019）『みんなの日本語中級Ⅱ本冊』
 - ・一般財団法人 海外産業人材育成協会（HIDA）、（旧）財団法人 海外技術者研修協会（AOTS）編（2015）『しんにほんごのきそⅠ』（『新日本語の基礎Ⅰ本冊漢字かなまじり版』）
 - ・一般財団法人 海外産業人材育成協会（HIDA）、（旧）財団法人 海外技術者研修協会（AOTS）編（2015）『しんにほんごのきそⅡ』（『新日本語の基礎Ⅱ本冊漢字かなまじり版』）
 - ・一般財団法人 海外産業人材育成協会（HIDA）、（旧）財団法人 海外技術者研修協会（AOTS）編（2015）『新日本語の中級本冊』
- 以上、スリーエーネットワーク発行
- ・坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語げんきⅠ』

- ・坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語げんきⅡ』
- ・坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語げんき解答』

以上、株式会社ジャパントイズ出版発行

- ・できる日本語教材開発プロジェクト 澤田尚美・高見彩子・立原雅子・濱谷愛，株式会社アルク出版編集部編（2019）『できる日本語初級本冊』
- ・できる日本語教材開発プロジェクト 澤田尚美・高見彩子・有山優樹・落合知春・立原雅子・西川幸人・濱谷愛・森節子，株式会社アルク日本語編集部編（2019）『できる日本語初中級本冊』
- ・できる日本語教材開発プロジェクト 山口知才子・高見彩子・澤田尚美・小川道子・日下倫子・酒井祥子・永田晶子・西川幸人・林英子・森節子，株式会社アルク出版編集部編（2019）『できる日本語中級本冊』

以上、株式会社アルク発行